

自主的・主体的な学びを支援する授業の在り方

教育臨床講座（教職大学院兼任）・藤原 一弘

1. 授業の基本情報

本授業は、教職大学院教育実践開発コースに所属している1回生を主な対象に開講されている科目である。コロナ禍を経験し制限が掛けられ続けた4年間を終え、学校現場はこれまでの学びをどこまで元に戻すのか、試行錯誤を行っている。この間、文部科学省や中央教育審議会からは、令和の日本型学校教育が出され、「協働的な学び」と「個別最適な学び」の一層の充実を目指すよう求められ、教育振興基本計画では、日本型のウェルビーイングの確立と向上を目指すことが盛り込まれた。一人一台タブレット端末が与えられ、これまでの学び方や進め方では対応できない授業環境にもなっている。

一方で、いじめの認知件数や不登校児童生徒数が過去最多を更新し続け、歯止めが利かない状態に陥っている。生徒指導提要が改訂されたり、学びの多様化学校（不登校特例校から改称）を全国展開することが発表されたり、画一的・一斉指導、旧来の生徒指導・不登校対応では救い切れない子どもたちの支援の在り方や学校自体の在り方にもメスが入ろうとしている。

加えて、子ども家庭庁ができ、こども基本法が制定されるなど、子どもが主権者の1人であることを強く認識し、子どもたちの権利を大切にしながら、よりよい学びを提供していく環境づくりが求められるようにもなってきている。

この他にも、教員の働き方改革や部活動の地域移行、少子高齢化による学校の統廃合や教員不足など、この数年間で、学校教育に関わる状況がコペルニクス的転回を見せ、これまでの当たり前が通用しない状況であるばかりか、これからもそれこそ年単位でなく、月単位・日単位で教育の在り方が変化していく世の中になった。VUCA時代の到来などと呑気なことは言っていられない世界の中で、学校教員は目の前の子どもたちの健全な成長を願い、日々学校教育活動を展開している。しかしながら、機能不全に陥ったり、変化にうまく対応できず、教員

も子どもも保護者も苦しんだりしている状況にある学校も全国に多く存在する。

本授業は、前述した様々な現代的教育課題を取り上げ、それらに対応できる授業プログラムやプロジェクトなどを履修生主体で構想・作成・開発を試みることにより、これからの教育に必要な学びの在り方を探っていくことを目的として設定されている。授業は同講座所属の白松賢教授と筆者の2人で担当しており、テーマを分けて分担して実施している。今年度は後学期の授業として開講され、教育実践開発コースに所属する1回生の17名が履修した。

2. 授業評価・授業研究の内容

①授業研究の内容について

本授業では、前述した目的を達成するため、とりわけ次の2点を強く意識して、カリキュラムを編成・実施し、具体的な成果を得ることができた。

一点目は、現在の教育課題に対応できる教員を育成するために、喫緊の課題を取り上げた演習を多く実施することである。教職大学院で学ぶ院生は、毎週2日程度、松山市内近郊の連携校で実習を行っており、授業実践や配属された学級・学年での観察や支援を行う中で、リアルタイムに現在の学校現場で起こる教育課題に触れている。その中で、教員がどのように対応しているかを見たり、サポートしたりすることで実感として、「自分であればどのように対応するか。」ということを考えながら過ごしている。本授業では、そのリアルタイムに感じる感覚を大切にし、イメージしながら、主体的に効果的なプログラムを開発し、自分が実際、教員として勤めた時に活用したいと思えるプログラム作りができるように心がけた。

実際の授業では、後述する3つのプログラムを作成するという課題を設定した。また、授業構成としては、①プログラム作成の主旨や現状を説明する講義や協議を行い、グループに分か

れて協働的に学べるようにし、役割分担などを行い、プログラムの作成を行い、その成果を発表・評価するというサイクルを取り、実施した。

二点目は、できるだけ学校現場の現状を取り入れることである。今回、授業を構成するにあたり、松山市教育研修センター事務所の ICT 担当、小田浩範指導主事、美藤貴指導主事に複数回来ていただき、「個別最適な学びプログラム」の講義と作成の支援、評価に加わっていただいた。現在の学校現場で実践されている事業や取組の最新状況を直接聞きながら、それを取り入れたプログラムを実践することで、現場で実際に使える学びを構築することができた。また、「不登校支援プログラム」では、広島県教育センター個別最適な学び担当が実施している「スクール s」という適応指導教室の実践を参考に実施することにした。先進地域で実際に行われている取組を活用してプログラムを創っていくことで、こちらも学校現場で使える価値や意義のあるものになることが明らかとなった。

以下、実際に実施した、3つのプログラム作成の概要を報告する。

【プログラム①SDGs (ESD) 気づきプログラム】

現行学習指導要領の前文でも示されており、今年度6月に出された教育基本振興計画でも今後の方針の大きな柱の1つに掲げられている、「持続可能な社会の創り手の育成」を実現していくためには、学校教育の中に、SDGsを浸透させることが重要であり、そのためには、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進していくことが何よりも求められる。学校教育活動の中に、無理なくSDGsやESDを取り入れていくためには、子どもたち自身がSDGsに関する内容やその理念に自然と関心を持ち、自ら探究したり、授業で意識したりするためのきっかけとなるような、「気づき」を与えるミニプログラムを作成し、実行することが肝要である。本授業では、17名の履修生が1人1つずつ、SDGsの目標を担当する形で、朝の会や短学活など、短時間で取り組める学びプログラムを作成することとした。

履修生は、自分が配属されている実習校の状況や児童生徒の様子を考えながら、自分が担当するSDGsに関心を持たせるために、どのような工夫をしていけばよいかを考え、取り組むことができていた。作成したプログラムは相互に披露し、評価・協議し合ったが、ゲーム的な要

素を取り入れたプログラムを作成したり、動画を活用したりしたプログラムもあり、どれも子どもたちのSDGsについての興味・関心を高めるような内容になっており、すぐにでも現場で活用できるものになっていた。実際履修生の事後アンケートでも、「どの発表も工夫を凝らしており、自分が教員になったとき、活用したいと感じた。」「自分もSDGsについてある程度、理解しているつもりだったが、新たな視点の気づきが多く、子どもたちにとっても有意義なものになるのではないか。」という意見が多数を占めていた。



（写真1・2）作成したSDGsプログラムを発表している様子

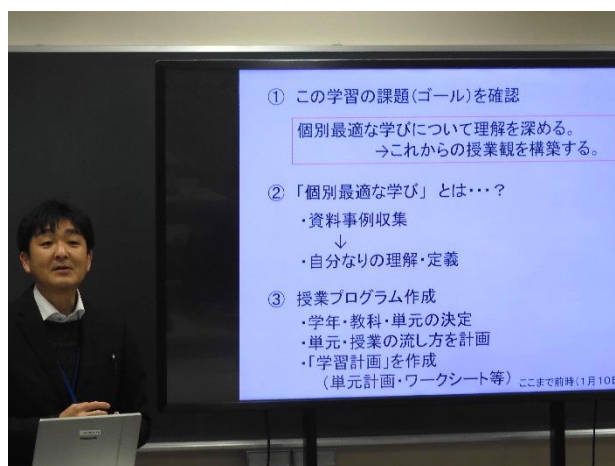
【プログラム②個別最適な学びプログラム】

令和の日本型学校教育の軸となる学びのあり方として、協働的な学びと個別最適な学びの一層の充実が求められている。どの教科においても、これまで以上に個々の状況や特性、習熟度や能力の差に合わせて、一人一人がよりよい学びを主体的に進められるような授業づくりや単元づくり、環境づくりができる教員の育成が急務になっている。本授業では、その期待に

応えるべく、個別最適な学びについて体験的に学べる演習を取り入れることとした。

具体的には前述した松山市教育研修センター事務所のICT担当指導主事である小田浩範氏と美藤貴氏を講師に迎え、現在のICTを巡る最新の動向を教授いただきつつ、個別最適な学びに関して基礎的な理解を講義していただいた。それを踏まえて、1人1つ、個別最適な学びを取り入れた単元アイデアを考えてみることを課題として出された。自分の専門教科や実習校で使えそうな単元を1つ決め、その中にどのようにして個別最適な学びを位置付けることができるかを考えて単元アイデアを作成し、それを1か月後の授業で、相互紹介を行うこととした。作成した単元アイデアを保管する場所としてTEAMsを使用し、互いの作成状況を参考にする「途中参照」を取り入れながら、授業時間外も学びの相互交流が生まれるような状況を設定した。この「途中参照」は、個別最適な学びを進める上で、重要な学びのスタイルとして注目されている。特にタブレットやクラウドを使用した途中参照は、松山市教育研修センター事務所も教員研修で扱い始めたところだということで、まさに学校現場で取り組まれ始めた最新の授業づくり、学びのカタチに触れることができる授業となった。

作成した単元アイデアは、互いに紹介して評価するだけでなく、小田・美藤両指導主事にも確認してもらい助言を受けるなど、深みのある学びを構築することができた。履修者も、意欲的に単元づくりに取り組み、個別最適な学びの意義や価値を改めて感じるできていた。出された課題を一人で調べ考えて提出するだけでなく、授業時間以外にも履修者同士が参考にしながら学びを進める新しい教育のカタチを経験することができる演習となった。



【写真3・4】ゲスト講師による個別最適な学びプログラムの講義と支援の様子

【プログラム③不登校支援プログラム】

今年度から新たに演習の1つとして取り入れた内容である。今やクラスに複数の不登校児童生徒がいるのは当たり前の時代になった。教育に対する多様な考え方も相まって、ますます学校に通う意味を見出しづらい子どもと保護者が学びの場を、学校以外に求めるようになった。また積極的に登校を促さないことが浸透してきたことで、学級担任は、どのように不登校生に対応すればよいのか、難しくなっている状況にある。不登校生への対応に対する不安は、教員志望の学生・院生の多くが強く感じているところであり、本授業では、不登校対応・不登校支援について体験的に学び考えることができるように設定した。

具体的には、現在の不登校対応の国の動向や都道府県の施策、愛媛県総合教育センターが行っている適応指導教室やサポートルーム、メタサポ事業などの説明を行ったあと、広島県教育センターに設置された「スクールS」という適応指導教室で行われている「不登校支援オンラインプログラム」を紹介し、それを参考に、グループで1つずつ、不登校支援の「オンデマンド動画プログラム」を作成することを課題とした。グループで協働しながら、不登校生が学びに関心を持ち、主体的に追究したり、活動したりすることを誘えるような内容を考えて役割分担を行い、作成したものを互いに発表し合い、相互評価を行った。

教職大学院の連携校実習や他の授業でも、タブレットや動画を利用した教材作成をたくさん行っているため、院生のスキルも高く、進んで動画作成に取り組んでいる様子が見上kられ

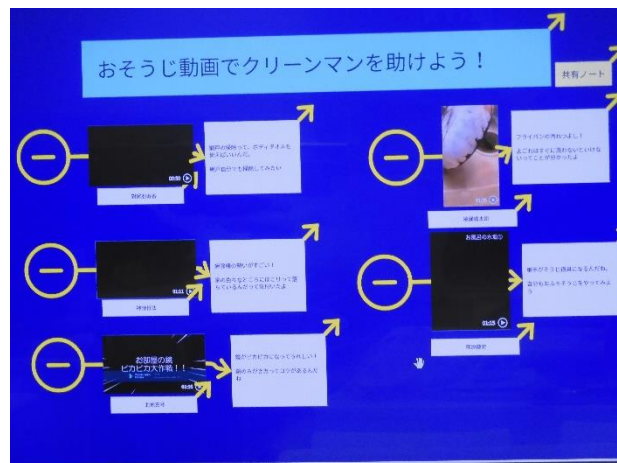
た。また、不登校支援に関する動画プログラム作成、という課題が履修生の関心を引くものであったようで、発表が2月にも関わらず、冬季休業中から、学外や自宅等で撮影・編集作業を行うなど、正規の授業時間外の自主的な学習の時間が大幅に増える結果となり、思わぬ効果を生むことが実証された。



(写真5・6) 不登校支援動画プログラムの発表をしている様子

最終的に3つのグループがそれぞれ1つずつの動画プログラムを作成し、発表した。実際に作成した動画のタイトルは「石のふしぎ発見」、「お掃除プロジェクト!」「目指せ!味噌汁名人」の3つである。どれも、履修性の専門教科や得意なものを生かした内容で構成されており、質の高い学び甲斐のあるコンテンツになっていた。また、もともと学習に意義を見出せない児童生徒、集団になじみにくい児童生徒が多いことを想定し、動画を分割して短時間の動画にするだけでなく、それぞれの動画の最後にキーワードを発表し、それがクロスワードを解いていくカギになっているような構成にしたり、日本各地の味噌汁の違いについて説明した

あと、石川県の特徴的・伝統的な味噌汁のレシピを動画付きで紹介し、家庭でチャレンジしてみたい、と思わせるような作りになっていたりするなど、不登校生の特性や思いに寄り添うとはどういうことか、学びの「支援」とはどういうことか、ということ深く考えて作成して出来栄になっており、とても意義深い演習となった。この3本の動画は、実際の現場で活用できないか、愛媛県総合教育センターや松山市教育研修センターなど、教職大学院と連携関係にある機関の担当に確認してもらう予定である。



(写真7・8) 履修生が作成した不登校支援動画プログラムの発表資料の一部

②授業評価について

各回の授業後に履修生に聞き取りやリフレクションやアンケートを行った結果の自由記述の一部を掲載する。

・班のメンバーの発表を聞き、子どもの実生活に繋がる課題設定を通して、学びへの意欲や探求心が高まり、それが次時以降の動機づけになると感じました。単元によっては、実生活に繋げやすいものとそうでないものがあると思

ますが、繋げやすい単元を抽出し、可能な限り実生活への繋がりを感じられるようなゴールから単元計画を作ってみたいと思いました。

・個別最適な学びにおいて、子どもたちが好きな方法でまとめられる選択肢を多く提示しておくことは大切だと学びました。記録の仕方においても、手書きがいい子、タイピングがいい子、後で写真を撮る方が集中して聞ける子など、大人と同じように子どもたちにもそれぞれに合う方法があります。それを自分で選んだ方法ですということは、社会に出ても大切な力だと思つたため、そのような選択ができる幅を提示しておくということを心掛けたいです。

・他者参照できるという点がクラウドを活用することの利点だと思います。友達の振り返りを見ながら考えをまとめたり、比較したりすることもできるし、自分の好きな時にまとめられるため、ロイロノートの共有ノートや Teams を用いた共有方法を考えていきたいです。”

・「個別最適な学び」に対する言葉だけの知識が、今回の授業を通して、実践的な思考へと変化した。総合的な学習の時間などでの個別の調べ学習等、現場では実施しているようでも、実は意外と個別最適な学びとはなっていないという気付きにもなった。

・今回は外国語で考えてみたが、グループでの話し合いにおいて、国語科で個別最適な学びを行うには、どのような方法があるのか検討したり、体育科等でのプロジェクトについて話を聞いたりすることで、学びが深まった。また、作成していたワークシートをスプレッドシートにするとさらに協働的な学びに広がるというアイデアも得ることができた。今回の授業で得られた充実感や学びの深まりを、次は子どもたちに味わわせることができるよう授業を考えていきたい。”

・講義の中で「学校復帰を求める必要があるのか。」という話題も出た。このことについては、私も考える機会が多いのだが、未だに答えを見つけないことができている。学校で働こうとしている立場としては、もちろん学校に来て欲しいという思いが強い。しかし、学校以外の場所で生き生きと活動している子供たちの様子を見る度に、学校に来て欲しいというのが教員のエゴなのではないかという不安が生まれる。私たち教員の思いを押し付けるのではなく、不登校になっている本人の思いをしっかりと汲み取り、その子が1番幸せを感じられる場所を提

供することが求められているのかもしれない。だが、学校に来てくれたらこんなことをしてあげたい、こんな経験をさせてあげたいというような自分の思いがあるのもまた事実であり、非常に難しい話題であると感じた。このことについて今後も様々な人と議論しながら考え続けていきたい。

・広島県で行われている、スペシャルサポートルーム（SSR）での個に応じた支援が印象に残った。そこで、さらにSSRについて調べてみた。広島県教育委員会個別最適な学び担当が、“全ての児童生徒”の「主体的な学び」の実現を目指し、子どもの実態に応じた多様な選択肢と自己決定を意識した教育活動を推進している。私は“全ての児童生徒”に個別最適な学びを提供するという点について改めて考えさせられた。今回、講義を見るまでは自分のどこかで“学校に通っている”全ての生徒に対してどのように個別最適な学びを提供すればよいかと無意識に考えていたように思う。そのため、もう一度考え直す必要がある。

また、子どもの実態に応じた多様な選択肢と自己決定を意識した教育活動についても、学校に通っている、通っていない関係なく、取り組むべきだと感じた。

これらは、「個別最適な学びプログラム」及び「不登校支援プログラム」を作成したり、発表したりしている中で実施したものであるが、「SDGs 気づきプログラム」も含め、現代的な教育課題を扱ったプログラム開発を行うことで、履修生が主体的・協働的に学び取っていく姿勢が随所に見られた。動画作成など、デジタルネイティブ世代の特色を生かした授業構成も、個々の意欲を高めたのではないかと考えている。履修生の言葉にあるように、これまで我々が行ってきた教育の在り方の良さと課題を適切に見極め、これからの社会を生きる子どもたちが学びの楽しさを感じるには、教師としてどのように支援していけばよいかを考え続ける必要がある。その意味でも、本授業を今年度、ブラッシュアップして実施したことは、筆者自身の大きな自信につながった。

次年度以降も、常に学校教育や子どもたちの変化を汲み取りながら、現場で活用できるプログラム作りができる授業として確立できるよう、精進を続けたい。